

戊辰戦争余話（薬師峠、灰爪、石地付近の戦闘）

戊辰戦争当時一三歳位だった、故品川勇太郎に昭和九年春、桜の花の下で聞いた記録である。戦争の話はデマが非常に多いので、史実と大分変っている処もあると思われるが、当時のうわさをしのびたい。

○お爺さん、戊辰戦争の話聞かせてください。

うん、会津戦争のことか。よしよし何時も言うことだが、俺もまだその頃は一三歳位の子供だったから精しいことはわからない。

○この辺にも沢山兵隊がいたんですか。

何でも、灰爪に下勢（一般に会津勢とも云う）が二百人位も泊まっていた。それから荒谷にも大勢いて、シタンケ（戸口氏）にその隊長が居たそうだ。

さて、五月の四日（慶応四年）頃には、もう官軍が鯨波まで攻めて来て、大砲の音がかすかに聞こえた。山の上に登って見ると、大砲の煙がもうもうと昇るのが見える。（話がだんだん面白くなって来る）さて、その中に、どんどん官軍が進んで来て、妙法寺という部落に六百人、それから、宮本にも大勢つめて居たんだ。

そこで別山村の庄屋だった俺の親父の高橋甚次郎が荒谷の下勢の隊長の処に行つて、「官軍がもうすぐ近くまで来ているが早く何とかして来れないか」と聞きに行つた。つまり、きぐりに行つたのだ。

すると隊長が「いやいや明日の朝は早くから大砲を三ヶ所に伏せるから心配するな。先ず、宮本の方へは薬師の頂上に一つ、それから正法寺方面には味方も大勢居るから勿論一つやるつもりだ。」と色々に作戦を聞かせる。

そこで庄屋は喜んで、直ぐ蓑を着て笠をかぶり、丁度雨が降って居るので百姓が田圃のたまり（水かけ）に行くふりをして、変装して、大水の出た別山川を遡って妙法寺の官軍の処に行き下勢の計画を報告した。

（此の頃椎谷藩や与板藩は官軍に恭順し、一部の藩は官軍の先導役等をして居た）ところが、其の翌朝になって荒谷の下勢が大砲を伏せに大勢して、わんさわんさと薬師の頂上めがけて登って行くと、上の方からタンタンと不意に官軍から一斉射撃されてしまった。夜中の中に宮本から官軍が二百人も来て、下勢の来るのを鉄砲を向けてちゃんと待って居たんだ。

さー、下勢は驚いて、大砲もなにもすっぱかして逃げてしまった。それを官軍が追っかけて山を下って来た。するとシモンケ（戸口氏）に泊まっていた隊長は丁度朝飯でも食べているりでお茶を飲んで話して居た。そいつを官軍が見つけたのだ。それで鉄砲でねらい射ちしたら、運よくか悪くか隊長の足に弾が命中したんだ。それでもさすが隊長だけあって、なかなか元気もよい。家を飛び出して裏の山に飛び込んで、かくれかくれ血の足を引きずって内越の方に出て、イモジ（若月氏）の家の前にある田圃のまつにつかれて休んで居たんだ。処が途に血をたらしして来たから、官軍がそれをさぐりさぐり来て、とうとう見つかった。さーそれで切り合いが始まった。然しいくら隊長でも弾は受けて居るし、おまけに一方はまつ、一方は水田で、全く自由がきかない。それに官軍は大勢だ。なんなく打ち首になってしまった。その時隊長もよほど残念だったと見えて、味方でも呼んだのか、ともかく、すごく大きい声でさげんだそうだ。

○何処の人だか知らないが、とにかく、おしい事でしたね。

それから妙法寺の官軍もどんどん夜明前から攻めて来て、田沢村から尾野内に入るあの山の細道で大砲をすいつけて、灰爪の下勢にぶっぱなした。それが丁度灰爪の村中に落ちて来たから、下勢は驚いて隊をまとめて山寺に登り、椎谷部落に下り村を通過してハナシ（小林氏）の前まで逃げたが、官軍はどんどん攻めてくるし、大砲を引っぱっては手間取るので、とうとう大砲をぶち壊して、田圃の中にころがして、田中村の方へ引き上げてしまった。

荒谷の下勢も勿論さんざんに負けて、正法寺坂まで行った。あの坂は山の登りつめた所が丁度直角に路がまがって居るんだ。そこで下勢が上から弾を打つ、官軍は弾が来るので皆んな頭を下げて、這うように登ってくる。すると下勢の一人が待ち伏せしてその曲がり角を利用してざくりざくりと三人までも首を切ってしまった。そこで敵の下勢が三人の首をかついておお威張りで山を下ろうとすると、今度は官軍が許さない。上から追いかけてけさがけにとうとう敵を切ってしまった。正法寺には下勢は沢山居て戦争も非常に激戦だったらしい。ところが官軍がとうとうお寺に火をつけたので皆人は逃げて行ってしまった。逃げ遅れて、お寺の中にかくれていたのは大勢焼き殺されて、あとから、しらべたら、骸骨がたくさん出たという話だった。

○お爺さん、村の多岐神社は焼かれなくて良かったね

それが其の当時どきくさまぎれて、誰も見つけてくれなかったが、戦争がすんでから村の者が会津に行ったとき一人が「別山村のあのお宮さんに俺は三日も四日も居たがねー」と話したものがあつたそうだ。

それから人足が不足したと云うので、庄屋が官軍の隊長と相談して、カゴダ（荒木氏）、マゴゼシ（高橋氏）、ホンネン（寺沢氏）等十数人を選出して、それに親父が付いて与板まで無事荷物を運んで行った。別山村は与板藩の支配だった。精しいことは寺沢紋吉に行って聞けばわかる。紋吉さんはあのころ二十二、三才で、与板まで行ったのだから良く知っているよ。

（追加）

下記は昭和九年に髭爺さん（品川勇太郎氏）に話を聞いた少年（指名不明）が後に追記したものと思われる。

○荒谷部落戸口氏の付近の杉の木に弾の傷跡が残っていたそうだが、今はその杉は無い。

○昭和二十五年頃、内越部落の道路拡張工事にイモジ（若月氏）の付近で遺骨が発見された。頭蓋骨がニケ出たそう。戊辰戦争の戦死者のものではないかと当時部落の総代や古老達にも種々聞いてみたがはつきりせず、結局無縁仏として法要し、真光寺の墓地に納められた。

最近の内越部落の高橋清太郎氏の証言により、戦死した隊長は当時荷物運搬に与板まで行ってきた寺沢紋吉氏の言として、水戸の浪士であったと云われ、又近くの山の中腹にその隊長の墓があることが判明した。

長岡互尊文庫の調べに依ると、西山町灰爪付近の戦死者、水戸藩士五十四名の名前が記されている。隊長はこの中に含まれているのであろうか。

○互尊文庫の稲川氏は官軍に対する下勢は一般に会津勢とも云われ、

(一) 正規軍 (朱雀隊、玄武隊、遊撃隊) 幕府の組織に統率された軍隊

(二) 衛鋒隊 (旧幕府の脱走兵) 隊長 古屋作左衛門

(三) 水戸の脱走兵 (柳組) 隊長 市川三左衛門 (後に水戸諸生党とも云う)

(一) の正規軍に対しては、戦後必ず現地も巡って調べ、塚を作ったりしてともらってある。然し、(二) (三) の脱走兵 (義勇軍) に対しては、全く戦死者のともらいはない。会津藩や長岡藩の様に、怨念も復讐に換えて記録して郷党は別にして、他は墓標もなく、姓名さえ不明なものが多い。草賊のように朽ち果てた彼等は、果たして何をしに越後にやって来たのであろうか。彼らは金穀の貯えもなく、流浪の戦鬪に自暴自棄になるものが多く、各駐屯地に汚点を残している。

○ 品川勇太郎 (ヒゲ爺さん) が五月四日頃大砲の煙が見えたと云うのは、荻羽、赤田方面の戦争の煙であって、鯨波の戦争は四月二十七日である。これは私の聞き違いである。

○ 別山村や灰爪村に居た幕府軍は水戸藩か会津藩かはっきりしない。西山町史に依れば (九七頁) 坂田の長橋多源治の処に富山隊宿泊の木札が四枚残っているのを見ると、灰爪の会津勢や、別山口の水戸勢の動きを狙っていたようだ。朝まだ明け切らぬ中に灰爪に駐屯していた会津勢へ、内郷を赤田方面から廻った官軍が大砲を打ち込んできました。朝懸の不意を打たれし下勢は狼狽を極めて、石地懸橋へ敗走しました。官軍はズンズン進んで別山口を死守 (?) している水戸勢へ間道から不意に攻撃を加えました。山形絃著「水戸藩の戊辰戦争」には五月十四日灰爪与板の戦い戦死六十一名、市之坪にて戦死十六名とある。

○ 官軍総参謀・山県有朋の手記「越の山風」に依れば、海道の本隊は是より先、五

月十二日、即ち榎峠、敗軍の翌々日を以て左（下記）の通りに配置せられ居たり。

（関原）薩半小隊、長一小隊、高田一小隊、加州二小隊、同砲三門、

（宮本）薩半小隊、長一小隊、（妙法寺）長一小隊、富山二小隊、加州一小隊、

（坂田村）高田一小隊、加州一小隊、（十日市）高田二小隊、薩砲三門、

（遊軍）薩半小隊、加州二小隊、（北条）加州一小隊

是は出雲崎方面の賊を掃討すると同時に長岡に迫らんとすの計画に出たるもので、これ等の諸兵は三好（軍監三好軍太郎）の指揮の下に、十四日石地方面に前進し、途中薬師峠及び脇の町辺の賊軍と交戦してこれを破り、石地を経て十五日に出雲崎に侵入したり。

○五月十四日 石地の激戦で西山町の戊辰戦争は終わった。五月七日会津桑名の主力が妙法寺口を敗走してから十四日まで、官軍は長岡攻撃が榎峠で意の如く進まぬため、信濃川敵前渡河を計画して、其の陣容を配置しつつ出雲崎方面の水戸勢の動向を探っていた。一方百姓は田植之期を前に連日雨ばかり降り、別山川は氾濫した。水戸、会津の兵は駐屯するし、息詰まる程の事件の連続に思う。十四日の総攻撃により官軍は圧勝したが、幕府軍の死傷者は大量であった。唯一救われたことは焼き討ちのなかった事である。別山村は与板藩の領地であったから、上納米倉庫から米を準備されたであろう。弾薬の運搬や人夫の調達など与板藩からの命令もあり、部落は全面的に官軍に協力した。

○戊辰戦史（上）大山柏著に薬師峠の戦闘状況として、五月十三日、会津兵（兵力不詳恐らく二小隊）と水戸脱兵の四十五名は灰爪に位置し、会津兵の一部をして薬師峠を警備せしめた。薬師峠守備の会津兵は大雨の中を峠（二七二米）に達したが、

峠には山小屋もなく、敵襲の模様もないので部隊は吉生津（ヨシズ）に下って宿営せしめ小隊長井上哲作以下九名が峠に止まり警戒していた。

官軍右側隊は払暁関原を出発。山道を薬師峠に向かった。敵は胸堡を築いて防戦するが案外兵数が僅少の模様なので官軍がドシドシ前進して、敵の陣地に突込んだが、敵はもう後退していない。そのまま峠下まで追撃したが、一向に手ごたえがない。そこで引き返して再び峠を登はじめると、後続の薩隊が来て、「折角ここまで来たのだから敵の巢窟を掃討しよう」と言ってきたが、そこで長藩に相談すると「よし、それなら行こう」と市野坪の敵本拠に向かった。・・・灰爪、石地を含めたこの日の戦闘で、官軍は戦死三名、傷者十名を出したに過ぎないが、同盟軍の被害は大きく、特に水戸脱兵の消息は全く判らない。